

5 住

<部落周辺と環境>

シリアナ族はデミニ河の支流——トトビ河流域の森林を切りひらき、巨大な共同家屋を建てて住んでいる。彼らがつつ畑とこの家屋の建地面積を含めると約200haもの広い土地であるが、それでも広大なアマゾンの中においては

ほんの一点にすぎない。このほど入域したシリアナ族、バキダリ族に関しては(パラフリ族に関しては後述)、部落の近くにトトビ河が流れている。トトビ河は河幅10m前後のものであるが、彼らにとっては唯一の水を得るところとなっている。ヤノマム族のいくつかの部落

の位置を全体的に見た場合、ブラジル側においてはそのほとんどがネグロ河の水系に生活している。

彼らの居住地は、気候区分上からいえば熱帯雨林気候に属するのであるが、実際にはその特徴を顕著に示していない。というよりも、およそ熱帯雨林気候区らしからぬ気候となっている。ひとくちに言えば、日本の梅雨時から初夏にかけての感じと似たところだ。

気候以外の環境面をとらえてみても、わずか200km下流のFUNAIのポストのあるあたりと比較して、より住みよい環境にあるといえる。つまり2～3の例をあげてみると、ポスト周辺ではやたらと多い害虫(特にビュンと呼ばれるブユの1種)が、部落周辺ではめっきり少なくなっている。また河についていえば、水の透明度も比較的高く、水温は低いが、昼間の水浴は爽快感を与えてくれる。もちろん彼らがこのような適地を選ぶにあたっては、長い年月を要したことなのであろう。

◇72年10～11月のシリアナ族ロベルト部落
(北緯3°) 天気表

日付	14時		21時		晴雨	降雨量mm
	温度	湿度	温度	湿度		
25日	29.5°	72%	26.5°	65%	☉①○	0
26日	31.0	70	26.0	70	①	0
27日	29.0	84	24.0	70	☂①	6
28日	28.0	86	25.0	73	☂①	10
29日	30.0	76	27.5	85	①☉①	0
30日	32.0	76	29.0	70	☉	0
31日	33.0	78	26.5	92	①☉☂	26
1日	28.5	94	26.0	87	①☂①	3
2日	29.0	86	27.5	75	①☉①	0
3日	28.5	90	27.5	78	☂☉	6
4日	29.5	88	26.5	80	☂☉①	5
5日	29.0	88	27.0	80	☂☉	13
6日	31.0	93	29.0	88	①☂☉	3
7日	32.0	86	27.0	70	①	0
8日	31.0	82	27.0	65	①	0
9日	29.5	92	26.0	75	①☂☉	4
10日	30.0		25.5	83	☉☂☉	13
11日	31.0	80	26.0	78	☉①	0
12日	32.0	68	27.0	76	①○	0
13日	29.5	86	28.0	85	①☂①	3
14日	30.5	72	27.0	80	①○	0



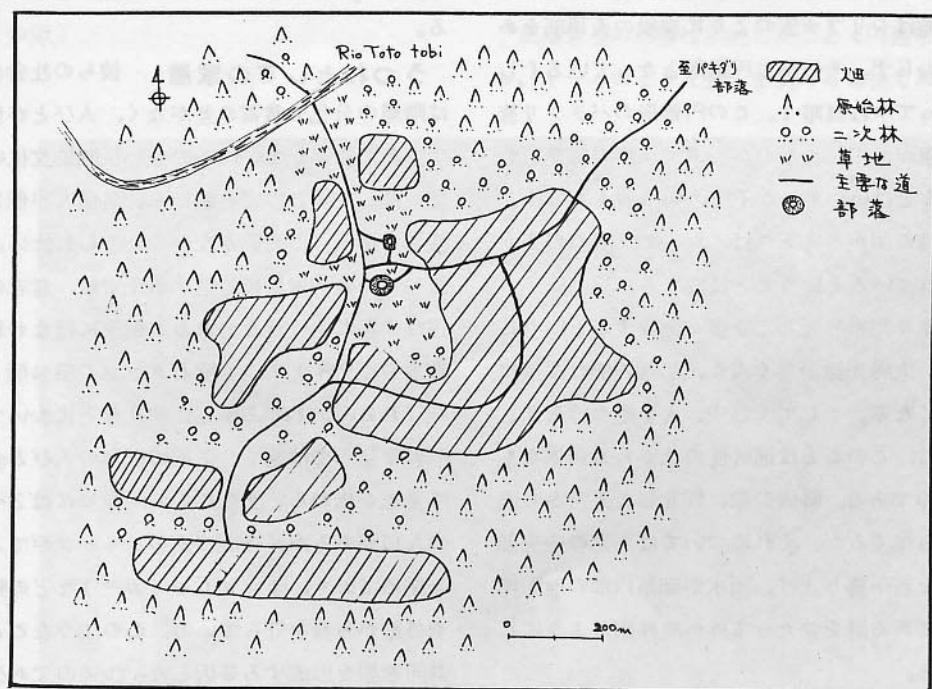
いつけん古墳か小山のような
シリアナ族ロベルト部落の家屋

< 部落家屋 >

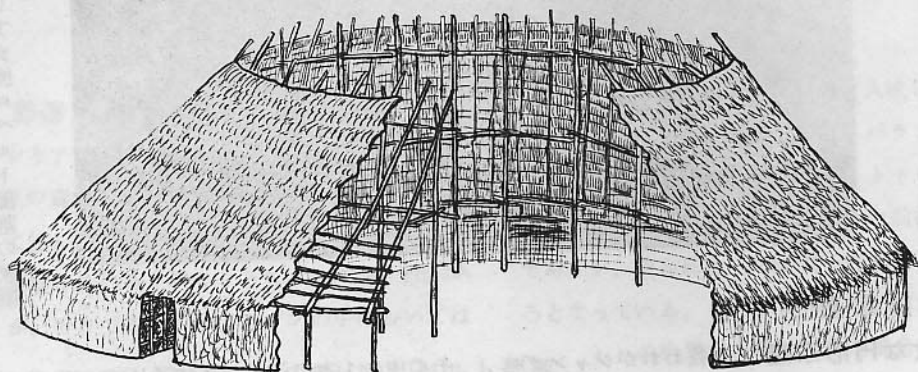
巨大な円形家屋 我われがジャングル
の中を2日間歩き、ついにそれが巨大な姿を現
わしたとき、我われの目には一見、小山のよう
に見えた。部落(この章では共同家屋と同義)
のまわりは畑となっており、その畑の中を幅50
cmほどの細い道が不規則に走っている。そして

その中の1本の道が部落に通じているのである。
この小山のように見えた部落も近づいてみると
その屋根、壁はすべて葉でふかれた緻密なつく
りの建物であった。この直径約50m、高さ約
10mの円錐台形の巨大な部落の中に1族約80
名が男女の区別なく住んでいるのだ。

◇ シリアナ族ロベルト部落近郊図



◇ シリアナ族ロベルト部落見取図



1:500

シリアナ族ロベルト部落の場合、その直径は5.4 m、高さ1.3 mで円形の屋根の天頂部を直径3.6 mと大きく開け、横から見ると円錐台形となっている。しかし、後述のパラフリ族の家屋形態はシリアナ族のように屋根の天頂部をあけておらず、その形は円錐形となっている（したがって中は真暗）。この円錐形のパラフリ族の形態が進歩したものがシリアナ族の部落形態であるとはいい難いが（そういう説もある）、居住性の面から考えれば、シリアナ部落の方がすぐれているということはある。

つまり屋根の天頂部を多く開放するということは、太陽光線が多く入り、部落内部は非常に明るくなる。そして1日中、火を使う彼らにとっては、このことは通気性の上からも最適なものなのである。降雨の際、開放した天穴から雨が入ってくるが、それについては部落の中央部の土を若干盛り上げ、雨水が部落内部の地面に掘ってある溝をつたって外へ流れ出るようにしている。

とにかく、この部落＝共同家屋は形や材質の面からみても、屋根は巨大なドーム形であるため、屋間の暑さなどからも守られ、草ぶきで通風性がよく、非常に合理的な建物であるといえる。

うっわとしての家屋 彼らの社会内では階層の分化や貧富の差がなく、人びとが同一の生業に従事して、同一の強い伝統的文化の中で生活しているのであるから、各個人が個別の住居を形成する必要がないのかもしれない。また一つの共同家屋に生活する上では、意志の伝達は非常に速く行なわれる。朝夕に行なわれる首長の〈ワイヤモ〉（歌とダンスの項参照）と呼ばれる、いわゆる朝礼、夕礼などにおいて同一の家屋内では速く、正確に部落の人びと全員に意志が伝わる。またこの共同家屋には2～3の入口があるが、夜間は木のジャバラ戸で入口を閉めており、オンサ（ジャガー）などの野獣や外敵から身を守っている。このようなことも共同家屋を形成する要因となっているのであろう。

◇ 部 落 家 屋 の 規 模 比 較 表

支 族 名	首 長	形 式	直 径 (m)	高 さ (m)	入 口 数	人 数	備 考
シリアナ	ロベルト	円錐台	53	8	3	62	近域最大
		変円錐	18	5	1	11	第2部落
シリアナ	フィアーリョ	円錐台	38	6	2	24	建設中
シリアナ	ブリニョ	円錐台	46	8	2	49	新築完成
パキダリ	ジュゼ	円錐台	43	6	3	11	
バラフリ	トメ	円錐	25	8	2	39	空屋
バラフリ	トメ	円錐	18	5	1		空屋 (第2部落)

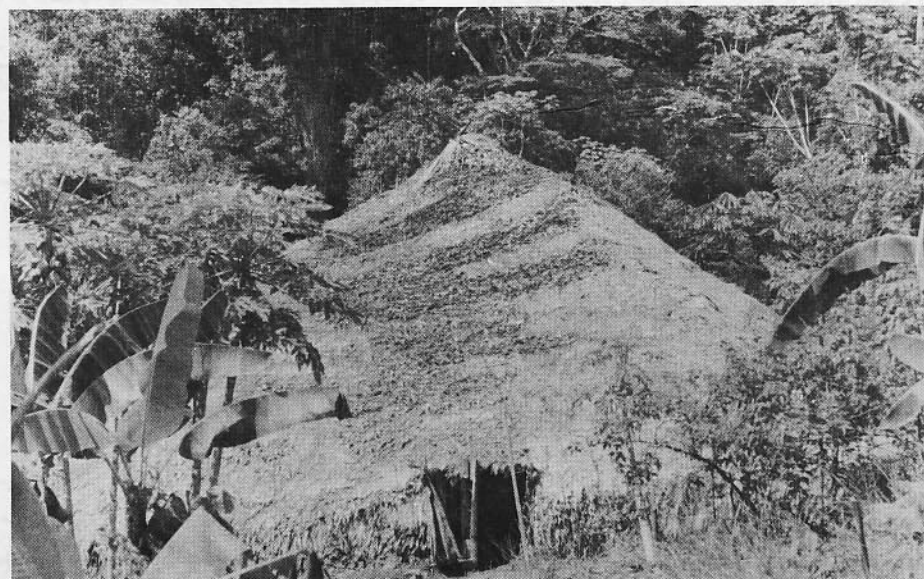
ただシリアナ族ロベルト部落においては1つの共同家屋のほか、カーロスの血族が中心に住む直径18m、高さ5mの円形家屋があり、またこの首長ロベルトが別棟(切妻式の屋根で土の壁、規模は5m×10m)をもつというような、ほかでは見られないものがある。ロベルトの戸建らの家については近所に住むミッシェンの影響を受けたものなのであろう。("親族", 参照)

＜バラフリ族の部落形態＞

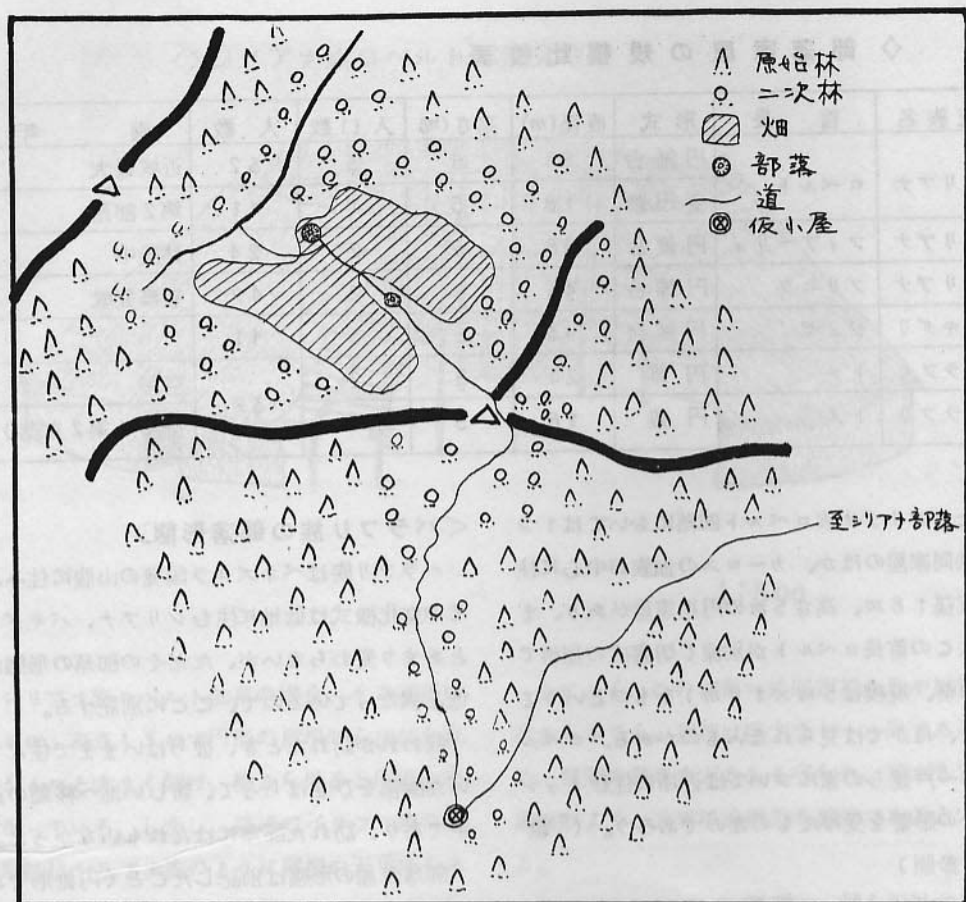
バラフリ族はベネズエラ国境の山腹に住み、その文化様式は低地に住むシリアナ、パキダリとあまり変わらないが、ただその部落の形態が他と異なっているので、ここに別記する。

我われが訪れたとき、彼らはいままで住んでいた部落をひきはらって、新しい地へ移動の途中であり、訪れた部落にはだれもいなかった。

部落家屋の形態は前記したごとく円錐形であり、ドームのような感じを受ける建物である。

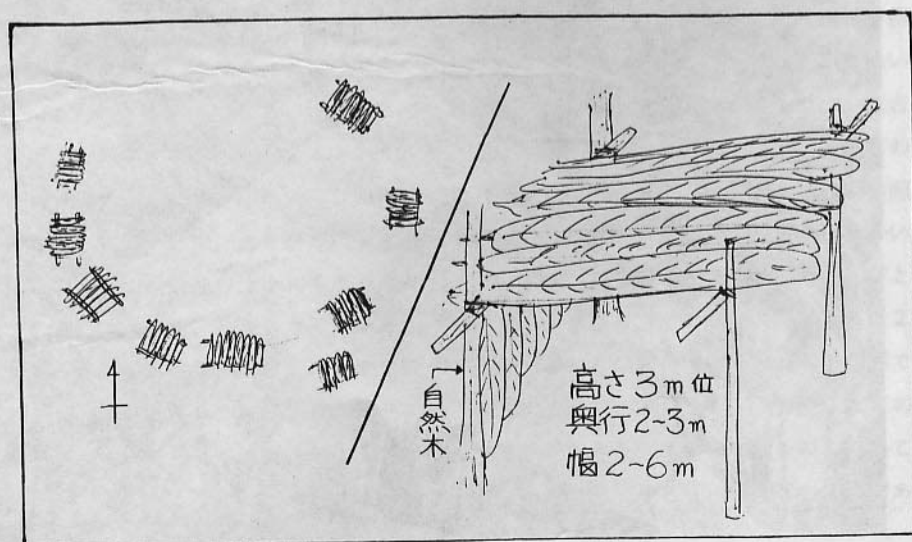


山奥にひっそりと眠る旧バラフリ部落。



↑◇パラフリ族部落近郊図

↓◇パラフリ族仮小屋部落図



この部落はトトビ河の源頭近くの山を3つほど越えた盆地状のところに存在していた。そのまわりの山腹にはバナナ、マンジョーカほか、多くの農作物を栽培していた。そして我われは、最初に発見した家屋の後方約200mの地点にもうひとつ同じ形の家屋を確認した。

これらの家屋の規模は、はじめのが直径25m、高さ8m、あとが直径21m、高さ6mであった。これは下流のシリアナなどくらべると、かなり小さいものである。しかし、規模と形は異なっても素材や建て方は同じものである。

彼らバラフリ族は引っ越しの最中であるといったが、旧部落から約500m離れた地点で仮住まいをしていた。これは山の中に各家族がバナナの葉で実に簡単な小屋をつくり、それで円陣を組むという、インディアン・キャンプ形式をとっていた。

この仮部落は新しい部落建設予定（候補）地へ行くための中継のためのものなのであろう。その候補地が遠ければ、このような仮住まいをつくりながら、順々に進んでいくのであろう。このとき彼らがどこへ移動したかについては不明である。聞いても、きまぐれに「あっち」と言って指をさすだけであった。

＜部落の建設＞

現在彼らが住んでいる部落の寿命はせいぜい数年であり、3年に1度程度の割り合いで新しい部落を建て替える。我われは幸いにも、2つの部落（シリアナ族ブリニョ部落、同フィアールニョ部落）の部落建設に出合った。

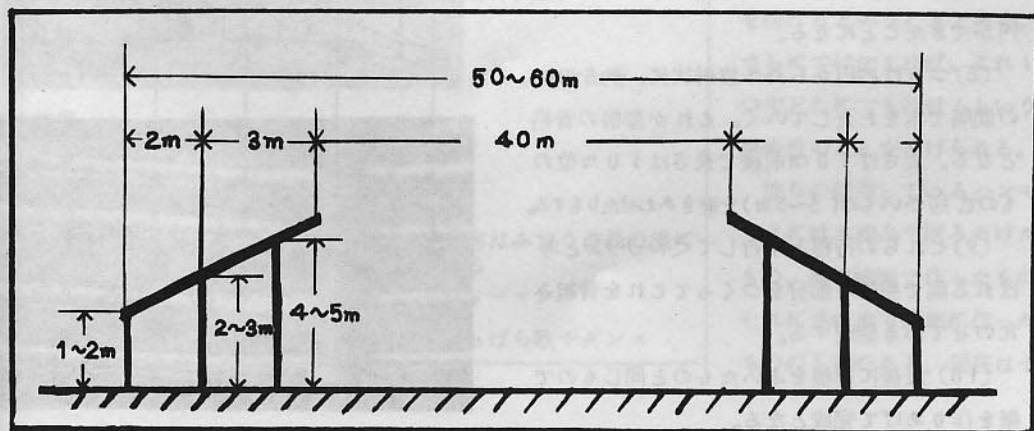
ヤノマムの女たちは農耕、漁撈、家事と労働量は多いが、この部落建設に関しては全くタッチしない。森林の開拓から屋根の草ふきまで、すべて男たちの仕事である。

つきにこの部落建設の過程をのべる。

〔1〕まず適地（これはたいてい従来のふるい部落の近くで河に近い所）の森林を焼き払いその後、整地する。焼き払い森林の面積は建設する部落の建地面積の約2倍（約100ha）である。そして建地をよりよく整地し土台が決まる。

〔2〕つきに太さ約15～20cmの木を円形に打ち込んでいく。これが部落の支柱＜トゥッキ＞となり、高さは約4～5mである。

〔3〕各おのの支柱の後方2～3mに同じ太さの木を打ち込んでいく。つまり支柱が描く円より大きいめの同心円を描くわけで、これらの木の高さは2～3mのものである。木を打ち込む手際は、地面に穴を掘り埋め込むという程度の





右・上から⑧⑨⑩
かれらはくぎや金づちなど使わない。

ものである。

〔4〕主柱の先に、こんどは横に木をわたしていく。ちょうど輪をつくるかっこうになる。これを結ぶのはすべて木のつるである。

〔5〕4と同様にしてるの外円の柱にも木を輪に組んでいく。

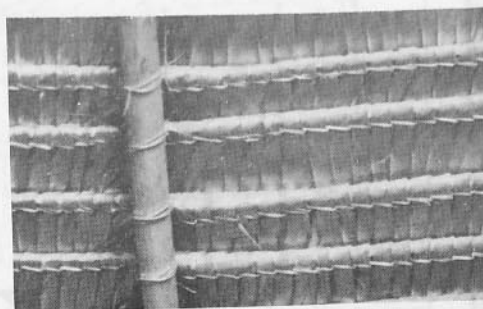
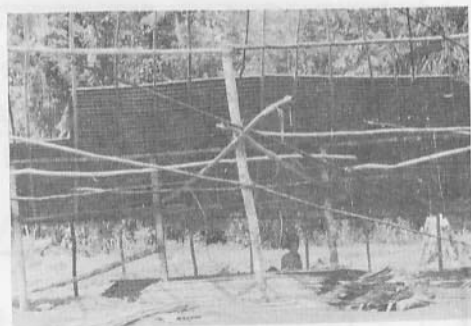
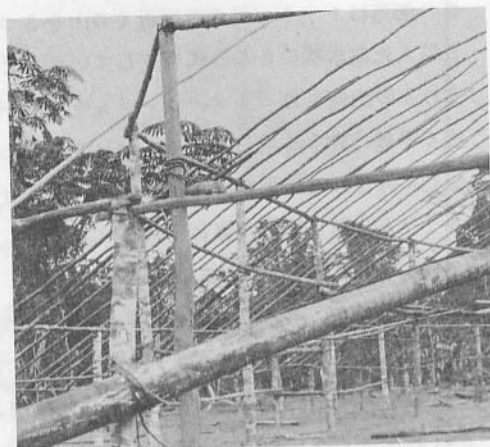
〔6〕つぎに最外円の柱を打ち込んでいく。これがつまり部落の大きさになる。高さは1~2mと低いもので、これが入口の高さとなる。

〔7〕同じくこれらの柱にも横に木をわたしていき固定する。これで上から見ると3つの同心円ができたことになる。

〔8〕つぎは内円から外へ放射状に、約50cmの間隔で木をわたしていく。これが屋根の骨格となる。太さは10cm前後で長さは10m位のもので、短かいもの(3~5m)を継ぎあわせたりもする。

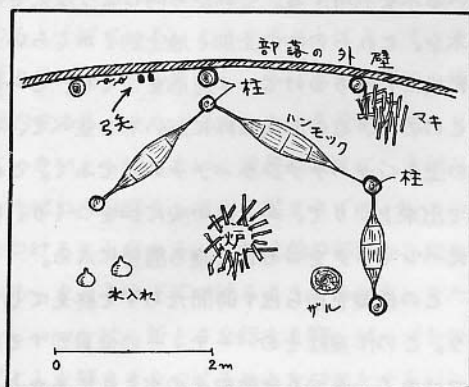
〔9〕これらの行程と平行して<ヤハナク>と呼ばれる葉で屋根の部分をつくってこれを骨組みにのせていき固定する。

〔10〕最後に屋根をふいたものと同じもので壁を作りあげて完成となる。





◇ 部落内物質配置図



◇ ヤノママ族のおもな行動とその行動空間

場所 行動	部落内	部落外	両方	備 考
睡眠・休息	○			ハンモックで
排泄		○		大便是特定の場所、尻ぬぐいは木で
入浴・行水		○		近くの河
化粧			○	
性交		○		昼にジャングルで
育児	○			
炊事	○			
食事	○			
接客	○			来客はふつう首長の横に寝る
儀礼・祈禱	○			シャーマン
娯楽	○			もっぱら歌やダンス

<くらし>

火 これらの部落の中で、成員はほぼ家族単位にかたまって生活しているわけであるが、各家族はそれぞれ1つのいろりを設けている。この火を中心にハンモックをつるして寝起きしている。この火は彼らの生活に、重要な役割りを果たしている。調理用の火として使われるのはもちろんのこと、1日中火をたやさないために、その煙で虫や野獣を防ぐ効果もはたし、火の暖かさは、夜間の気温の低下から彼らを保護する。最近ではマッチも入っているが、我われは彼らがそれを使っているのを見たことがない。

寝具 彼らの寝具は唯一ハンモックである。ブラジル・アマゾナス州地方の一般家庭においても使用されているこの寝具は、がんらい南米インディオに源を発しているもので、いまでは形こそ変われ全世界に普及している。特に高温多湿のアマゾン河流域では、ハンモックは快適な眠りを約束してくれる寝具なのである。

まず第一に、網状であるがゆえに風通しがよ

く、暑さと湿っ気をしのぎ、また衛生的でさえある。そしてなによりも害虫から身を守るのである。缶に浮いて寝るといことは、アリ、サソリ、ムカデなどのものから身を防げるということである。さらにつけ加えれば、これ1つでどこにでも行けるという携帯性のことがあげられる。

彼らの使用しているハンモックには木綿糸で編みあげたもの、藤の繊維で作ったもの、それに木の皮で簡単に作ったものの3種がある。現在はそ

のほとんどが木綿の糸で作られたハンモックを使用しているが、それでも2〜3割の者が藤のものや木の皮のもので寝ている。

快適さの点では、やはり木綿製のものが抜群で、肌ざわりがよいのと、温かいということでは、いざばん好まれている。これを作るには、極太の毛糸ほどある木綿糸約300本を縦糸にし、まずその両端をたばね、横糸を10〜15cmぐらいの間隔で縦糸300本に1本1本しばっていくのである。大人用1つをつくるのに、ざっと見積っても500mの木綿糸が必要な勘定になる。

藤のハンモックはその素材の性質上、非常に涼しくて昼間はいいのだが、少し冷え込む夜間にはふさわしくなく、それに裸の彼らには肌ざわりがよろしくない。

木の皮のハンモックというのは、10cm前後の幅の木の皮を1m50cmぐらいに切り、3〜6本の木の皮のベルトの両端をつるや草でしばってできあがる。部落内ではほとんど使用されないが、旅先での眠りにはその場でこれを作り用いる。

露營 旅先の宿泊のことが出たので、ついでに旅小屋について書く。ヤノママたちはよく旅をする。日常的には部落から部落へと1日の

行程であるが、1日で行けない場合や、都合で部落に泊まらない場合、あるいは時々行なり数100kmの長旅のときなど、彼らは森の中に雨露をしのぐ程度のおおいを作って寝る。

まず、ジャングルの中でも特に下が乾いて、枯葉などが積もっているような場所を選ぶ。次に直径10cm前後の木を2mぐらいの長さに切り地面に穴を掘ってそこに立てる。もちろん4本の木で四角い小屋ができるように立てるのであるが、そのうちの1〜2本はすでに生えている木を利用する。それから同じような太さの木を、これらの柱の上部(地上約2mぐらい)に横にしばりつけて、4辺形をつくる。さらにこののら、この四角の枠に細い木を並べて、その上を<ヤハナク>かバナナの葉でふく。これで出来上がりで、あとは中央に炉をつくり、柱にハンモックをつるして寝る態勢に入る。

この作業を彼らは1時間たらずで終えてしまう。この作業はそのパーティーの全員がするのではなく、ふつう半数のものがこれにあたり、あとの半数はその夜の糧を獲りに行くということとで、効率よく旅先の夕ぐれを費やす。

